

起業を通じた子育て期の母親の成熟プロセスに関する研究

—C. ギリガンのケアの倫理に基づいて—

依藤 光代 (株式会社地域計画建築研究所, yorif-mt@arpak.co.jp)

松村 暢彦 (愛媛大学 社会共創学部, matsumura.nobuhiko.bc@ehime-u.ac.jp)

A study on the process of the mother's moral development through entrepreneurship:

Based on 'Ethics of care' by Carol Gilligan

Mitsuyo Yorifuji (Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto)

Nobuhiko Matsumura (Faculty of Collaborative Regional Innovation, Ehime University)

要約

子育て期の母親である起業家 20 人へインタビューを行い、母の役割、起業家の役割、自分の区別に着目し、それぞれにおいて他者との関係を維持・形成しながら成熟していくプロセスを C. ギリガンによるケアの倫理に基づいて検証し、できること (can)、求められていること (should)、やりたいこと (will) という要素を成熟プロセスに当てはめて分類し、タイプごとの傾向を考察した。起業家の役割を通して、他者と互いに取り替え不能の非対称な関係を形成する中で「他者の他者としての自分」を見出す。そして、自分の気持ちを尊重することが母の役割を通して家族にもいい影響を与えることに気づく。各役割への時間の配分において葛藤が生じるが、起業に取り組むことは子育てに正負両面の影響を与えるという複雑な影響の構造の中で、それぞれに与える影響の大きさを考慮しながら自分が納得できる選択を模索し決断できるようになっていると考えられた。本来対称的關係が中心で公正志向が支配的であるはずの起業活動において、他者を取り替え不能な「非対称的關係」を形成しながら取り組まれる起業活動は思いやり志向が特徴的であり、「思いやり志向の起業」と呼ぶことにする。起業家として事業に取り組む中でも母親の役割を犠牲にしない方がいいような対策や配慮が重要で、そのためには思いやり志向の起業についての理解を広めることが重要である。事業に取り組む中で発生する環境の変化やモチベーションの低下などの変化に対してスムーズに対処するためには、should の要素が重要となる。特に can がきっかけとなり起業したタイプにおいては、他者に対して実際にサービス等を提供し非対称的關係をつくりながら感触を確かめるという小さな実践の機会を早い段階から設けることが必要になると考えられた。

キーワード

ママ起業, 思いやり志向の起業, 成熟プロセス, ケアの倫理, 非対称的關係

1. 研究背景と目的

すべての女性が日々の暮らしに生きがいや充実感をもって家庭・地域・職場で輝くことができる社会の実現を目指す「女性活躍」が政策として掲げられている。人口減少とともに生産年齢人口が急激に減少する見込みの中で、女性の労働力としての社会参加へ期待が高まっている。量的側面を見れば、女性は出産・育児と就業との両立が困難であったことから 20 歳代後半以降の労働力率が急速に低下し M 字カーブを描くとされていたものの、近年は状況がやや改善されてきている (加藤他, 2016, p.39)。女性の労働力率を一定以上に高めることは、出生率を高めることにもつながるとされ、少子化対策としての意味でも注目されている (加藤他, 2016, pp.42-45)。これらのことから、女性活躍は、女性の中でも子育て期の母親の就労において特に課題が大きく、またその視線は母親の労働者としての側面に主に注がれていると言える。

女性の活躍に関する研究会で検討された調査結果にも

示されているように、女性らにとって働く意味として重視されているのは、収入や経済的な自立のほかに、「社会や人とのつながりを実感できるから」や「自分が成長するため」などの項目であり、本人にとっての働く意義も重要とされていることが分かる (加藤他, 2016, pp.98-100)。

東山はその臨床心理士としての経験から、今の女性・母親が働く理由について、次の二点を挙げている。一点目は能力を活かしたいという気持ちであり、二点目は「仕事を通して自分の人生を豊かにし、家庭を社会化し、その開かれた家庭という姿を土台にして、子どもたちに人生の意味を教え、人間的な体験を深めさせることができると信じて働く」ということで、「自己確立は家族との関係から切り離れたところにはあり得ない」と述べている (東山, 2006, pp.48-49)。つまり、母親が働くとき、働く自分としての自己とともに、母親としての役割が強く意識されていると言えよう。

母親の就労については、家族との関係性に関するもの (例えば、小坂他, 2005) や、専業主婦との意識の違いに関するもの (例えば、矢澤他, 2003)、母親自身が抱く心理的ストレスに関するもの (例えば、安河内, 2008)、

キャリア形成の観点からとらえるもの（例えば、矢澤他、2009）などにおいて、研究の蓄積がある。母としての「親役割」と、働く個人としての「個人役割」という多重役割に着目した一連の研究からは、働く母親は負担が大きく疲労感が強いことから子育てとの間で葛藤が起きやすいが、他方「生き生き」しているという結果が得られ、両役割間で互いにポジティブな影響も確認されている（柏木、2003, pp.219-224）。また、母親が職業役割に満足していることが子どもとの安定した関係の運営や良好な子育てを可能にし、それが子どもの発達を促すという知見も報告されている（柏木、2003, pp.218-229）。

ここで、自分個人としてのアイデンティティが確立することについて、鷺田は仕事などを通じた他者との「かけがえのない」と感じるような関わり合いを経験することによって、「他者の他者としての『わたし』」がはじめて確認されると述べている（鷺田、2011, pp.138-153）。自己を確立するためには他者とのつながりが重要なはたらきをすることから、働くことによって自己が「生き生き」するのだとすれば、他者とのつながりが形成されることが一因として考えられる。

以上のように、親としての役割と働く個人としての役割が、葛藤や対立を経ながら調整され調和されていく過程では、働くことを通じた他者との関係性の形成・変化や、働くことによって生じた家族との関係性の変化など、様々な関係性の変化を経験していると考えられる。これを母親という一人の人間の中でのプロセスとして捉えた実証的な研究は見当たらず、女性活躍に関する政策の基礎的知見とするため今後の研究の蓄積が必要である。

すべての女性が輝く政策パッケージ（すべての女性が輝く社会づくり本部、2014）では、子育て等の経験を活かして女性が再チャレンジできる働き方の一つとして起業が取り上げられている。起業支援機関に対する調査である平成27年度女性起業家等実態調査（経済産業省、2016）によると、起業支援機関の窓口では「女性の起業に対する社会的な関心が高まった」（47.4%）、「起業を希望する女性が増えた」（42.9%）と受け止められており、女性の潜在的起業家が増加していることが伺える。ただし女性起業家に関するアンケート調査（経済産業省、2011）によれば「家事・育児・介護との両立」を課題として回答した割合が、男性4.9%に対し女性18.1%と高く、役割間の葛藤や対立が発生していることが考えられる。本論ではこの母親による起業という働き方に着目する。

母親による起業は、近年「プチ起業」や「ママ起業」とも呼ばれ、小さな事業を立ち上げ、企業に雇用されない自由なライフスタイルと、既存の概念にとらわれない自由な発想で展開する、新しい働き方であるとされている（公益財団法人埼玉県産業振興公社、2018）。また鹿住（2017）によればママ起業家は、一人で自宅起業する傾向にあり、事業機会の追及や主たる生計費の獲得というよりも、家庭責任と仕事との両立を図りつつ自身の経験や趣味・特技を生かして副収入を得ることを目的としてい

る者が多い。さらに鹿住（2017）は、ママ起業について、女性一般の自己効力感の低さが起業に対する自信を低下させていることを指摘し、それを解消するために女性による起業についての社会的正当性を持たせることが重要であり、そのための公的支援の充実を主張している。また母親に限らなければ、女性起業家の事例報告は1990年代以降増えており、女性特有の起業就労実態の把握の観点からは、古賀（2011）による女性起業家の就業行動と意識の特徴を研究したものなどがある。経営者としての女性の特性と評価については、大野・土田（2015）による、農村における女性起業経営者について経営者特性の評価を行ったものなどがある。企業活動としての特性については、渡辺・遠藤（2007）により女性起業の零細性に着目した研究が行われている。支援策については、藤田（2015）により、漁村における女性起業活動の支援策が検討されている。女性による起業を地域活性化の観点から捉えた研究もある（西山、2012）。女性起業家の発達の観点からは、今井他（2006）による女性起業家の自己表現に着目したものなどがある。これらの研究があるものの、いずれも複数の役割が調整・調和していくプロセスという視点からの考察はなされていない。

人間関係の中での様々な経験を通じて葛藤を引き起こしながら、それを乗り越えて考え方や態度を変化させていくプロセスについては、C. ギリガンがケアの倫理を提唱している（ギリガン、1982）。家族を含めた自分以外の人間との関係性の中で、自己犠牲的な思いやりを示す態度から、一人の自律した人格へと成熟していくというプロセスを示したものである。それまで「規範がどのように内面化されるのか、正しさはどうとらえられるのか」という「公正さ」に基づく観点から研究されていた発達理論に対して、「もう一つの声」として配慮と責任に基づく別の発達プロセスが存在することを指摘した（山岸、2010, p.450）。本研究で注目する、複数の役割を通して様々な他者と接しながら考え方や行動を変化させていくプロセスは、このケアの倫理に基づいて、成熟プロセスとして捉えられると考えられる。

本研究では、ママ起業家へのヒアリング調査によって、母親が起業を通して他者との関係を形成しながら、母の役割と起業家の役割の間で発生する葛藤について克服し、調整や調和を果たしていくプロセスを、ケアの倫理に基づいて検証する。それにより、母親が起業家として働くことにより成熟していくプロセスを実証的に明らかにしようとするものである。

2. C. ギリガンの「ケアの倫理」について

ケアの倫理は、1982年にC. ギリガンによって提唱された道徳性の発達についての理論である。当時コールバーグが提唱していた道徳性理論は、行為者を男性に限定したものであったため、その枠組みだけで発達を論じることの問題性を指摘した。特に女性を含めた検討を行い、それまで明らかにされてこなかった「もうひとつの声」としてケアの倫理を提唱した。複数の道徳原則や規則の

対立・葛藤をはらむジレンマを題材に男女の道徳的思考の違いを検討し、また女性が道徳的に葛藤を抱くことになる中絶に注目してインタビューを行い、道徳性の発達段階について検討した。サンプル数は多くはないものの、丁寧に詳細まで検討を行っている。

コールバーグの提唱した道徳性は「公正さの道徳性」であり、どの人に対してもどんな状況でも正しいこと、公正であることが目指される。それに対してケアの倫理に基づく道徳性では、他者への共感や関係性に基づく判断がなされ、自分とつながりをもつ他者に配慮して他者を傷つけないことが考慮される。抽象的な原則ではなく、個々の状況で一人一人を具体的に尊重し、配慮される必要性に応答する責任を果たす道徳性である（山岸, 2010, p.450）。なお、ギリガンによる原著で使用されている「care」を、岩男他（1986）により日本語に翻訳される際に「思いやり」の言葉が充てられ使用されている。

ケアの倫理では、道徳性の発達を3段階とその間の移行に分けて整理している（ギリガン, 1986, pp.129-130）。

第一段階は、他人の保護と指示のもと生活するような状況が想定され、自分が生きるために自己中心的な態度を取り、また選択肢がないため責任も取らない。しかしそのうち、自分の存在は他者に受け入れられてこそのものであると気づき、より他者を意識し、少しずつ自身を社会化していく。

第二段階では、社会が一般に女性に求める「女性らしさの慣習」に従い、他人の要求に応え行動しようとするようになる。しかしその態度は、他人のために自己を犠牲にすることにつながり、他人と自分を不平等に扱うという不合理さに直面し、人間関係を見直す必要に迫られる。この移行段階では、他者への思いやりを重視しながらも、自分の気持ちに対しても誠実になっていき、自分も他人も傷つけないような道徳律を模索することになる（ギリガン, 1986, p.164）。

第三段階では、自己と他人は互いに依存関係にあると認識するようになる。他人のために自己を犠牲にするのではなく、まわりの人間への影響を考慮した上で判断し行動するべきであり、それが自立的な責任ある人間の態度であると考えようになる。それは他人から自己を「分離」していくプロセスであり、その分離はこれまで恐れていた「孤独」ではないと知ることになる。また正当な「権利」を主張する強さも持つことになる（ギリガン, 1986, p.249）。

成熟プロセスではこのように、他律的な態度であった人間が、「社会的なかわりあい」というより広い視野をもって、一人の人間としてより自律的かつ主体的に考えるやり方を身に着けて、社会の中で責任を果たしていけるように変化していく。

なお、その後の実証的研究の蓄積によって、ギリガン流とコールバーグ流の2つの道徳性発達に対応する、配慮志向（care orientation）と公正さ志向（justice orientation）の2つの志向があること、どちらの志向を使いやすいかに関してジェンダーの関与が見られるが男女ともに両方

を使うこと、問題や状況によってどちらを使うかが異なることが示されている（山岸, 2010, p.452）。そのジェンダーの関与については、ギリガンによって男女の経験の違いに起因するものと説明され、道徳性の志向は後天的・慣習的に身に着けられるものとされている（ギリガン, 1986）。

ケアの倫理の中では、自己と他者という二者間の関係性に焦点が当てられてきた。母親による起業の場合は、母として家族との関係性を維持しつつ起業家として他者との関係性を新たに形成することから、それぞれの役割を通した人間関係の中での経験が、時に相互に複雑に関係しながら、葛藤を生じさせていると考えられる。近年母親たちの間に強くみられるようになってきた個人という自己（柏木, 2003, p.213）を加え、母親としての自己を「母の役割」、起業家としての自己を「起業家の役割」、個人としての自己を「自分」として区分し、それぞれについて他者との関係性をとらえて成熟プロセスを描き出すことを試みる。

3. 調査の概要

3.1 対象者について

山梨県内で起業している子育て中の女性起業家に対して、ヒアリング調査を実施した。対象者は、山梨県内で開催される子育て世代の母親向けのイベントであり、子育て中の女性起業家が中心となって運営している「ママまつり」と「マンマメルカート」に着目し、その出店者や関係者から抽出した。抽出にあたっては、なるべく業種が偏らないよう、また起業後の年数の偏りも考慮し、16人からヒアリングに協力を得た。ママまつりは、平成23年から山梨県笛吹市で開催している年1～2回のイベントであり、マンマメルカートも同じく平成23年から年2回程度開催しているイベントである。さらに、こうしたイベントに出店することの少ない、より専門的な業種も対象とすべく、山梨県を拠点に活動する医療や建築、起業コンサルティング等に携わる子育て中の女性起業家4人を、対象者として追加した。調査対象者は、計20人である。対象者の属性について、表1に示す。起業してからの年数の平均は5.9年で5年未満が9名、5年以上が11名である。年齢は平均40.2歳と高めであるのは、起業プロセスがある程度継続している者が抽出されているためである。

なお本研究でのママ起業とは、子育ての責任との両立を図りながら起業に取り組んでいること、と定義し、起業をしてから出産した場合も含むことにする。起業後の変化だけでなく、起業前後の変化も含め成熟プロセスと捉えて解釈している。また前職と起業の業種が同じであるものは、定義によっては「独立」とされる場合もあるが、本研究では広義に起業として扱っている。

3.2 調査の方法

あらかじめ主要な質問を用意しながらも、回答に合わせて掘り下げや追加の質問を行う、半構造化面接を行っ

表 1：ヒアリング対象者の属性

番号	記号	起業後の 経験年数(年)	業種の分類	年齢	末子の年齢 (歳)
1	A	20	専門型	40 代後半	10 以上
2	B	20	専門型	50 代前半	10 以上
3	C	12	サービス型	40 代前半	5 ～ 9
4	D	5	ハンドメイド型	30 代後半	5 ～ 9
5	E	5	サービス型	40 代前半	5 ～ 9
6	F	1	サービス型	40 代前半	0 ～ 4
7	G	6	ハンドメイド型	30 代後半	10 以上
8	H	3	ハンドメイド型	40 代前半	10 以上
9	I	4	ハンドメイド型	40 代前半	5 ～ 9
10	J	2	サービス型	30 代後半	0 ～ 4
11	K	5	専門型	30 代前半	0 ～ 4
12	L	5	ハンドメイド型、サービス型	40 代前半	10 以上
13	M	4	ハンドメイド型	30 代後半	5 ～ 9
14	N	2	ハンドメイド型	30 代後半	0 ～ 4
15	O	1	ハンドメイド型	30 代前半	0 ～ 4
16	P	5	サービス型	40 代後半	10 以上
17	Q	9	サービス型	40 代前半	5 ～ 9
18	R	0.5	サービス型	40 代前半	0 ～ 4
19	S	5	サービス型	40 代後半	10 以上
20	T	3	専門型	30 代前半	0 ～ 4

表 2：事業の概要

記号	事業の概要
A	ビジネスなどで悩みを持つ人に対して、一対一で「セッション」を行っている。場所は喫茶店など。対象の多くは、女性の起業家。
B	建築関係の事務所に勤めた後、独立し、設計事務所を運営している。
C	子育て中の母親やこどもを対象に、各種セラピーを実施している。自宅や公共施設のほか、イベントなどでも実施している。
D	自宅でハンドメイドの教室を開催し、また製作したものをイベントやネットにて販売している。主な対象者は、女性。
E	自宅に美容のサロンを開いて、女性やママたちに対してエステを実施。メイク教室も開催している。活動の範囲を老人ホーム等でのボランティアや高校での授業にまで広げ、また資格を取得した女性の活躍の機会づくりも行っている。
F	食文化について、教室やワークショップを開催している。関心のある人や子育て中の母親など幅広い人を対象に開催している。
G	スクラップブックの製作・販売を行ったり、教室を開催したりしている。自宅や公共施設で実施している。
H	自宅で編み物の製作をしている。また、編み物をつかった交流の場づくりを企画している。
I	自宅で洋服を手作りし、ネットやイベントで販売している。
J	メイク教室や、耳つぼの施術を行っている。イベントに出張したり、独自に定期イベントを開催している。
K	助産院を経営し、妊婦だけでなく、産後のママや家族を対象にした教室なども実施している。
L	自宅でパンづくり教室を実施している。また、女性の起業を支援する NPO の設立に取り組んでいる。
M	公共施設や店舗の一画などで、写真等を使ったクラフトの教室を開催している。また、医療関係の資格を所持している。
N	こども用の帽子を中心に、手作りをして、イベントやネットにて販売している。製作は自宅で行っている。
O	男児のための着物の製作を自宅で行い、ネットやイベントを通して販売をしている。
P	体の内側から健康にする食事を提案し、調理してイベントなどで提供している。
Q	アロマを使ったベビーマッサージの指導を行っている。自宅や公共施設で実施している。
R	メイクや服装などの本人に似合う色のコーディネートについて、アドバイスを行っている。現在は起業した直後で、主にイベント等で活動している。
S	エステを女性と男性に実施するサロンと、耳の飾りを製作するスクールを経営している。また、心理学を活かしたイベントの実施も企画している。
T	自宅で、ネットを通じた物販を行っている。発送作業では「雇用」も創出している。起業したい女性に対するコンサルティング事業にも着手している。

た。あらかじめ用意した質問は、起業のプロセスと事業の展望、発生した問題や課題、生活満足の度合の変化などについてであり、その中で出てきた人間関係や葛藤に注目して掘り下げていった。平成28年2月から3月初旬にかけて、各1時間～2時間程度実施した。

3.3 起業の概要

表2の起業の内容については、まず、物販など形のある商品を扱うものがある。既製品（Tさん、以下本節では敬称略）と手づくり品に分かれ、手づくり品は、イベントやネットを通しての製作販売（D, I, H, N）と、教室を開催することによる指導（G, M）がある。次に、対人サービスがある。美容・健康に関する、施術（S, E, J）や教室等での指導（Q, E, J, R）があり、イベントや自宅サロンで行われている。ビジネスや心理面に関するカウンセリングやセラピー（A, C）もある。食に関して、調理して提供するもの（L, P）や教室等での指導（F）がある。さらに、国家資格を有するものがあり、建築関係事務所の運営（B）や、助産院の運営（K）がそれである。最後に、ほかの起業家への支援があり、NPOを設立して活動するもの（L）や、個人的に活動するもの（T）がある。

これらが対象とするのは、多くは女性であり、中でも母親である。活動場所は、公民館などの公共施設や、自宅サロン、カフェなどの店舗の一角、事務所、イベントなどの一時的な場所などである。

4. 起業を通じた母親の成熟プロセスについて

4.1 成熟プロセスのパターン

4.1.1 駆動要素による類型

起業を通じた各人の成熟プロセスについて、できること（can）、求められていること（should）、やりたいこと（will）の3つの要素に当てはめた。エドガー・H・シャイン（2003）によるキャリア形成に関する理論を参考にしたものであるが、理論では2つ目の要素が「何をなすべきか（must）」とされているのに対し、ここでは他者との関係性をより重視して should を用いている。要素のパターンから分類

した結果を図1に示す。表3～6は、解釈した成熟プロセスの詳細を示したものであり、左列は母の役割、起業家の役割、自分に分けて他者との関係性や成熟に関することを描き出し、右列では can、should、will を当てはめた対応を示している。凡例を図2に示す。

can、should、will のいずれかから始まり、他の要素を確立しながら、3つの要素が揃っていく。3つが確立するのに前後して、何かの出来事をきっかけとして各要素が縮小・拡大などの変化をする場合がある。この成熟プロセスについて、can に駆動されるタイプを「can 駆動タイプ」、should に駆動されるタイプを「should 駆動タイプ」、will に駆動されるタイプを「will 駆動タイプ」と名付けた。さらに要素が確立していく中で起こる変化について、「縮小を経験したか・していないか」「直近は拡大傾向であるか・ないか」の二つを軸として分類し、can 駆動タイプでのうち縮小経験がないのは「c-1型」、縮小経験があり直近の拡大傾向がないのは「c-2型」、縮小経験があり直近

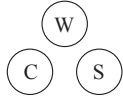
凡例	
成熟プロセスの要素について	
要素の確立	 やりたいこと (will)、できること (can)、求められていること (should) の各要素が確立
要素の変化	 要素が縮小  要素が不安定化  要素が回復・拡大
その他	
数字	事象との対応番号

図2：図1、表3～6の凡例

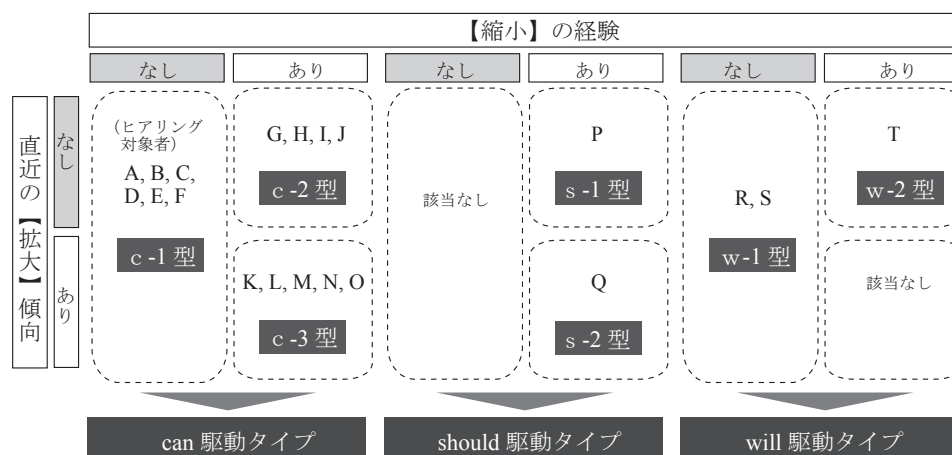


図1：成熟プロセスの分類

[illegible]

[illegible]

表 5：成熟プロセス（その3）

Kさん				Lさん				Mさん				Nさん				Oさん			
母	役割	起業家	自分	母	役割	起業家	自分	母	役割	起業家	自分	母	役割	起業家	自分	母	役割	起業家	自分
第1～2段階	成熟プロセス	1	助産院を院長として運営。まず、妊婦さんや子どもを抱える人々のニーズに応えてきた。	第1～2段階	成熟プロセス	1	お菓子やパン作りのスキルがあつた。妊婦さんや子どもを抱える人々のニーズに応えてきた。	第1～2段階	成熟プロセス	1	写真を使ったクラブの好みを。夫の活動に伴い、地域に引越すので、新しい友達をつくるための一つのツールとして役立ててきた。	第1～2段階	成熟プロセス	1	以前から手作りは好きだった。	第1～2段階	成熟プロセス	1	地元ではないので、お友達をさがさず、こどもができてから増えすぎた。
			仕事に勤んでおり、結婚や出産は、あまり考えていなかった。				双子のベビー用品の交換会や、双子のママの座談会など、双子の子育てを楽しむような活動を仲間が増えてきた。				クラブの写真をブログにアップすると、いろいろな反応が多く、自宅でサークルを始めた。								
			自分も結婚・出産し、自分の子に就いてやりたい。こどもの院の事業をやりたいと思った。				話をしながら、ベビー用品をつくるような、サロンのような、ママの会を自分自身で始めた。				それいいね、としべりな。こどもと一緒に作るの、おもしろい。ママと子どもが一緒に作るの、おもしろい。ママと子どもが一緒に作るの、おもしろい。								
移行段階	成熟プロセス	2	結婚・出産し、院長と母の二本柱となり、やりたいことをやる。時間があるように感じた。	移行段階	成熟プロセス	2	子育てを最も重視し、優先することにした。事業は、まず子育てで集中させた。時間があったら、こどもが成長し、時間が増えてきた。	移行段階	成熟プロセス	2	ママ友たちだけが集まる「サークル」ではなく、開創的な活動にも参加できる。教室に変わって、イベントなどにも参加した。	移行段階	成熟プロセス	2	第一子は3歳までは家で面倒を見てあげてきた。第二子は、保育園に入園してからは、保育園で過ごす時間が増えた。	移行段階	成熟プロセス	2	着物を小物を作ることが楽しくなり、イベントやネットイベントや起業セミナーのために、知り合いが一緒に増えた。
			やがて、事業が順調に進み、人手が足りなくなり、パートやアルバイトを雇った。				夫が「そんなに働いてどうするの」「女は家のことをするの」「旦那が働いてくれるの」「旦那が働いてくれるの」「旦那が働いてくれるの」。				ママ友たちだけが集まる「サークル」ではなく、開創的な活動にも参加できる。教室に変わって、イベントなどにも参加した。								
			「これやりたい」といって、自分自身で事業を始めた。				夫が「そんなに働いてどうするの」「女は家のことをするの」「旦那が働いてくれるの」「旦那が働いてくれるの」「旦那が働いてくれるの」。				ママ友たちだけが集まる「サークル」ではなく、開創的な活動にも参加できる。教室に変わって、イベントなどにも参加した。								
第3段階	成熟プロセス	3	美顔院に子育てをしながら、これまで院長として指導してきた内容が間違っていないと実感している。	第3段階	成熟プロセス	3	マルシェイベントの規模が大きくなるにつれて、運営の負担も大きくなった。姉や妹、NPO設立に向けて、スタッフを有償にする必要があると感じた。	第3段階	成熟プロセス	3	ママ友やお客さんが、こどもと一緒に作るの、おもしろい。ママと子どもが一緒に作るの、おもしろい。ママと子どもが一緒に作るの、おもしろい。	第3段階	成熟プロセス	3	イベントでは、帽子を手にとり、自分自身でデザインした帽子を、ママ友やお客さんにプレゼントした。	第3段階	成熟プロセス	3	事業は再開したいが、「こどものための余格」を残す必要がまだあると考えている。それに、「将来こどもを育てていきたい」。
			美顔院に子育てをしながら、これまで院長として指導してきた内容が間違っていないと実感している。				マルシェイベントの規模が大きくなるにつれて、運営の負担も大きくなった。姉や妹、NPO設立に向けて、スタッフを有償にする必要があると感じた。				ママ友やお客さんが、こどもと一緒に作るの、おもしろい。ママと子どもが一緒に作るの、おもしろい。ママと子どもが一緒に作るの、おもしろい。								
			美顔院に子育てをしながら、これまで院長として指導してきた内容が間違っていないと実感している。				マルシェイベントの規模が大きくなるにつれて、運営の負担も大きくなった。姉や妹、NPO設立に向けて、スタッフを有償にする必要があると感じた。				ママ友やお客さんが、こどもと一緒に作るの、おもしろい。ママと子どもが一緒に作るの、おもしろい。ママと子どもが一緒に作るの、おもしろい。								

表 6：成熟プロセス（その4）

P さん				Q さん				R さん				S さん				T さん			
母	起業家	自分	成熟プロセス	母	起業家	自分	成熟プロセス	母	起業家	自分	成熟プロセス	母	起業家	自分	成熟プロセス	母	起業家	自分	成熟プロセス
離婚を経験し、自分が笑顔でなくなぐ、子どもの笑顔も奪ってしまったと感じた。	子育てで支援団体の一員として、ママを支援する事業に取り組んだ。組織の看板を背負った「責任」を感じながら、ママの笑顔を取り戻すことに決めた。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階
起業してはいる、起業したママたちを支援するたため活動をはじめた。ママたちが活動する、第一歩の出店できる場所をついた。ママたちを笑顔に「ナカマ」。	起業してはいる、起業したママたちを支援するたため活動をはじめた。ママたちが活動する、第一歩の出店できる場所をついた。ママたちを笑顔に「ナカマ」。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階
活動から手を引くことにした。仲間がなくなり、また落ち込んでしまった。でも、大切なものは、関係性の量ではない。ママたちとつながる仲間をさがすことに決めた。	活動から手を引くことにした。仲間がなくなり、また落ち込んでしまった。でも、大切なものは、関係性の量ではない。ママたちとつながる仲間をさがすことに決めた。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階
子どもから「ママが笑顔でいるために、ママの目元が笑顔になる必要がある」と言われた。現在も今までも、ずっと守り続けていたのだと思った。	子どもから「ママが笑顔でいるために、ママの目元が笑顔になる必要がある」と言われた。現在も今までも、ずっと守り続けていたのだと思った。	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階	前職では男性中心の組織に勤め、男女関係がしつこく言われたり、男と関係が深いという場面が多かった。出産を機に退職した。	孤独を感じながら子育てをしているママを知り、また自分の経験の中で子どもを育てるの難しさを感じた。	1 2 3 4 5	第1～2段階
言葉から食に関する仕事がある、と思った。今起業し、食に関する仕事がある、と思った。																			

の拡大傾向があるのは「c-2 型」とし、should 駆動タイプ、will 駆動タイプについても同様に分類した。該当する者のいないカテゴリーもあった。

c-1 型が 6 人と最も多く、続いて c-3 型の 5 人、c-2 型の 4 人となっており、can 駆動タイプの合計が 15 である。should 駆動タイプは 2 人、will 駆動タイプは 3 人となっている。次節からは、タイプごとに順に成熟プロセスを見ていく。

なお、出産し母親となるとこどもへの献身的なケアに取り組む態度が見られ、この自らのことより相手への思いやりを重視する態度は、ケアの倫理の第二段階に当たると考えられる。本節では特記する場合を除いて、第二段階以降の成熟プロセスについて記述することにする。また本節における表現は、各人の発言を尊重し、あえて表記を統一しないこととする。

4.1.2 can 駆動タイプの成熟プロセス

c-1 型について成熟プロセスの解釈を記述する。

A さんの場合、家族の生活を支えるために、起業して懸命に働き続けてきた（第二段階）。出産し、こどもを言い訳にしてやりたいことができないまま老いていくのが嫌だと感じるようになった。子育てにおいてこどもが母親を必要とすると思われる時期を見極めた上で、それまでの乳幼児期は事業を優先して、自分自身のやりたいことにチャレンジしようと決意した。こどもは自分の母に預けて海外に渡航して修行し（移行段階）、帰国してから始めた起業家としての事業で他者からの手ごたえを感じ、経験を積む中で自分自身が納得する事業が出来上がっていった。事業が安定し、稼ぐというプレッシャーから解放され、自分自身が楽しく起業家としての事業に取り組めるようになっていく。当時思い切って行動したからこそ今があると、肯定的に捉えている（第三段階）。

B さんの場合、結婚しても「嫁」ではなく一人の人間として生きたいと願っていたものの、結婚後は義理の両親と同居し、嫁として、また母として生活しながら働いていた（第二段階）。近所の同じ状況にある母親が、家を出ていってしまったことをきっかけとして、起業家として「家族の暮らし方」を重視しながら仕事をするようになった。自分自身の子育て経験から、子育てには親以外の大人が関わる方がいいものの、それは家族親族という狭い関係の大人だけでなくコミュニティという広い関係の中で子育てができればよいと考えるようになった（移行段階）。母としての経験を活かし、そして起業家としてのスキルも役立てながら、自分自身が重要と考えるコミュニティ活動について、仲間とともに実践している（第三段階）。

C さんの場合、子育てを行う中でその大変さを経験し（第二段階）、ほかの母親たちのために、自分自身ができることがあるのではないかと考えるようになった。それまでは「気軽」な気持ちだった起業家としての事業を、より真剣に取り組むようになり、事業を通して母親たちが明るい表情になっていくことをやりがいを感じている。母

の役割と起業家の役割は、割り当てる時間についての葛藤を生じさせていたが、こどもの成長につれて解消しつつある（移行段階）。自分のこどもの成長にも役立てることができ、またほかの母親たちの役にも立てられるようなスキルを事業の中で身に付けていくことで、自分自身も充実し、母親としての役割も果たすことができ、起業家としても意欲的に事業に取り組むことができるという、両立ができていく（第三段階）。また、少しずつでも新たな客層を開拓していく必要があるが、教室の受講者が所属する会社での開催をセッティングしてくれたり、イベントへの出店時に企業の人から声を掛けられて別の会場でも実施することになったりと、紹介や依頼により活動の場が広がっている。

D さんの場合、子育てのことを重視し、自宅でできる仕事を選んで起業した。子育ては特に今しかできないとの思いから重視しているが、家事を求める夫の水準と折り合わず対立することもある（第二段階）。起業家として製作に取り組んでいる時間は、自分自身が癒されているように感じており、大変な子育てをしているママたちにも同じように味わってほしいと考えるようになり、子連れで参加できる自宅での教室を重視している（移行段階）。本当ならもっと事業に時間をかけたいところであるが、妻として夫との関係の調和をはかり、なおかつ夫から起業家として認めてもらうため、生産性を向上し収入を増やすやり方に変更することにしており、一方でママたちに癒しを提供するという自分の考えも尊重してニーズがあれば自宅教室も随時開催するつもりでいる。逆境でも楽しもうと意識しており、同時に事業に取り組む姿を見て、仕事は楽しいものだとかどもに思ってもらいたいと願っている（第三段階）。

E さんの場合、母として子育て「だけ」をするような「家にこもっている」生活が続き、体調を崩した。回復したあとは、こどもがいても自分自身がやりたいこともするべきだと考えるようになり（第二段階）、癒しを必要としているほかのママに提供するため、起業して自宅で美容のサロンを始めた。当時は、母でも妻でもない、自分自身が一人の女性として輝きたいと考えていた。起業家として他者の求めに応じて新たにメニューを追加するうち、「社会を変える手段に出会い」、これを活かして自分自身の手でほかのママたちを幸せにしていきたいと思うようになった（移行段階）。求めに応えきれるか自信がない時もあるが、役に立てるように自分自身として、また起業家として学びを深めていこうと自分の意思を固く持っている。いまでは、母の役割も引き受けながら、起業家の役割も、「全部が自分」だと考えている（第三段階）。

F さんの場合、夫が起業したため、妻として夫の仕事をサポートした。母として子育ての時間も十分に取れず、また自分自身の健康も損ねてしまうほど忙しい日々を送った（第二段階）。その末に転機が訪れ、自分を犠牲にするのではなく、頼まれてもできないことはできないのだし、「自分の未来」を自分で決めることが重要であると気づき、その後離婚した。後に味噌づくりの技術と出会い、

家族の健康を維持するために家庭内で受け継いでいってほしいと考えるようになり、発酵教室を起業家としてプロデュースするようになった。新たなパートナーとの間に子どもができたので、母として離乳食に発酵を取り入れることにし、ほかの誰かとともに取り組みたいと思い、助産院で離乳食教室を開催した（移行段階）。今度は子育てでも大切にしながら、起業家として女性らしい働き方をしていきたいと考えている（第三段階）。

次に、c-2 型について記述する。

G さんの場合、写真を使ったクラフトを自分が楽しいと感じて、その作品を見た周りの友人である母親たち（以下「ママ友」と呼ぶ）の声に応じて起業家として教室を開催するようになった（第二段階）。子どもが小さいうちは母として写真もたくさん撮影していたが、子どもが成長して撮影する機会が減り、それを使ったクラフトへのモチベーションが下がり、自分が楽しくなくなってきた。またママ友たちも子どもが成長するにつれて働きだしたため参加者が減ってきた。このような状況の中、自分は中途半端な状況にあると感じており、今が転機であると受け止めている（移行中）。

H さんの場合、母として子育てをするうちに家族以外との関係性がなくなってしまった時期がある。家計のために勤めたり、こどもの近くで働くために起業したりと、母・妻として家族のために仕事をし、他人からのアドバイスや夫からの言葉をそのまま受け入れて行動に移してきた（第一段階）。パートで働くうちに自分は手芸が好きだのだと気づいた。商品をつくって起業家として販売し始めた（第二段階）。テレビで見たことをきっかけに、かつて居場所を必要としていた自分やこどもの経験も踏まえて、手芸と関連付けた居場所づくりがしたいと思い立ち、起業家として自発的に数回開催した。自信はまだ確かではないが、母として、起業家として、自分として、居場所づくりにも取り組んでいきたいと考えている（移行中）。

I さんの場合、子どもができ会社勤めを辞めて、社会との関係が絶たれ自宅に「閉じ込められてしまった」と感じた。子どもに着せたい服を作るため、ハンドメイドの製作を開始した。家族の協力が得られないため、こどもの世話を自らがやるしかなく、子どもが小さいうちはハンドメイドの製作を断念した期間もあるが、子どもが成長し子育てが落ち着いてくるにつれ隙間時間に製作の時間を確保できるようになった（第二段階）。イベントに出店して客とやりとりをする中で、起業家としての自分が作るものが求められ喜ばれていることを感じるようになった。SNS などで周囲の女性が「キラキラと輝いている」ように見え焦りがあった時期もあるが、自分の作るものを喜んでくれる人のために丁寧に作ることで誰かと「つながって」いることが重要だと思うようになり、戸惑いがなくなった（移行段階）。これからも自分の感覚を大切にしながらつくり、また子どもを着せたいと思うような服も作り続けていきたいと考えている（第三段階）。

J さんの場合、子育てや家事はやって当たり前と言われ

るので、育児だけでは「自分が満たされていない」と感じていた。家計のために働くことになり、資格を活かして起業した。事業が軌道に乗るまでは「誰かに助けてもらいたい」と考えもしたが（第二段階）、「これじゃいけないと思って」誰かに頼るのではなく自分の意志で行動することを決意し、とにかく定期的に活動続けることにした。目の前の人に感謝されることをやりがいに感じている。SNS などを通して、ほかの起業家の行動や実績について簡単に情報が手に入るため、その情報に振り回されそうになることもある（移行段階）。目の前のお客さんを大切にし、すぐに手を差し伸べられる身近な存在でいられることを目標に取り組むことにしている。お母さんが明るいと家の中が明るくなるので、自分の気持ちを大切にしながら前向きに取り組んでいきたいと考えている（第三段階）。

次に、c-3 型について記述する。

K さんの場合、起業家として助産院の運営に取り組んできている。結婚出産し、母として自分の子にしてあげたいことも、起業家としてほかのママに提供するようになった（第二段階）。起業家の役割と母の役割の二本柱となり、時間のやり繰りにおいて葛藤が生じてきた。自分自身が起業家としてやりたい事業を思いつき、人手が足りなくて困っていると、院で出産したママたちがスタッフになって支えてくれるようになり、さらにやりたい事業の構想を共有して、その実現のために人材や情報などの資源を紹介してくれるなど、やりたい事業を実現するためにネットワークが広がっていていると感じている（移行段階）。母として、起業家として、子どもにとってよりよい未来を創っていくための各種講座などを実施していく予定で、自分の感覚を尊重して取り組んでいくつもりである（第三段階）。

L さんの場合、双子の子育てで大変な経験をしたことと、ママ友とリフレッシュのためにお菓子作りをした際に喜んでもらえたことから、子育てに疲れているママの癒しになればいいと、自宅にてパンづくりの教室を開業した（第二段階）。事業よりも、母として子育てを最も重視すると決めており、できる範囲で教室を続けてきた。ほかにも、ママ友たちと気軽に出店できるマルシェイベントを開催するなど、自分の事業以外にも、周りの人に必要とされていると思うこと、あったらいいなと思うことに幅広く取り組んできた。事業の将来を考えた時に自分一人で細々と取り組んでいくことに対する限界を感じ、また同時期に起業家としてマルシェイベントを持続的に運営していくために、ボランティアを脱するための活動組織づくりという課題を抱えていた。組織づくりというチャレンジには躊躇していたが、仲間の後押しにより決断でき実現に向けて取り組んでいる（移行段階）。起業に全力で取り組むことで、母として子どもたちに「夢がかなう」ということを伝えたいと考えており、それを受けて当初は起業に対していい受け止め方をしていなかった夫は、母親の起業が子どもに与えるプラスの影響を認めて態度を前向きなものに変化させている（第三段階）。

Mさんの場合、写真を使ったクラフトが好きで、周りに請われて自宅で教えるようになった。他の人としゃべりながら一緒に作ると、ママたちにとってリフレッシュや出会いの場になることが分かった（第二段階）。知り合いばかりが参加するサークル形式では閉鎖的になってきたため、誰でも参加できる教室形式に変更して対象を広げ、イベントにも出店し始めたところ、客からの要望に応える形で出張による教室も開催するようになり、活動の場も広がっている（移行段階）。看護の知識があることから、クラフトのスキルと組み合わせることで、リハビリや介護に活用できるのではないかと可能性を感じている。社会と関わっているという実感がほしいので、子育てしながら働き続けていきたい（第三段階）。

Nさんの場合、こどもに手作りの帽子をかぶせたいという思いから製作を始め、イベントやネットで販売も始めた。こどもが寝ている間でないかと製作ができなかったが（第二段階）、保育園に預けることで製作の時間も確保でき、またこどもにとっても友達ができるのでいいことだと感じている。手作りの品は手がかかっているにも関わらずネット上ではとても安い価格で販売してしまっているが、「自分の作る商品を求めてくれる人」に買ってほしいと思い、納得のいく値段に設定し、オリジナルのタグをつけるなどして他と一線を画して売るように心がけている（移行段階）。イベントでは、帽子を手にとったママが笑顔になるのがうれしく、これからもひとつ一つ丁寧に作っていききたいと思っている。身近な人々からの意見も参考にしながら、自分がこどもにかぶせたいと思うような帽子を作り続けていきたい（第三段階）。

Oさんの場合、自分の友達がいない中でさみしさを感じながら子育てをしていた。もともと着物が好きで、長男に着せるために男児用の着物を手作りし始め、販売も始めた。起業後は販売イベントなどを通して知り合いや友人が増えた（第二段階）。男児用の着物を求めている人のためにオーダーを受け始めたが、注文が増えすぎて「こどもに構えない」状態になりいったん休業した。母の役割を全うするためにも、起業家として重視すべきものを見つめなおして整理した結果、着物を着る機会づくりなどの活動もしたいと気が付いた。かつてこどもに着物を着せて外出させると「かわいいね」と声をかけてもらった経験から、そういうさみしい状況にいる人に男児着物は提供していききたいとも思っている（移行段階）。今後は、母としてこどものための時間も確保しながら、起業家として将来こどもを雇える程度の経営を目指し、また他者のリクエストに応えながらも自分の気持ちを尊重して取り組んでいきたいと考えている（第三段階）。

4.1.3 should 駆動タイプの成熟プロセス

s-1 型について成熟プロセスの解釈を記述する。

Pさんの場合、離婚を経験し母としてこどもの笑顔を奪ってしまったと感じていた。組織に属していたがやめて、知識を活かして起業した。同時に、起業家の一人として、起業しているほかのママたちを支援したいと自分

で考え、支援活動を開始した（第二段階）。大きな自信を得た経験になったが、規模が大きくなるにつれ組織化してしまい、自分の意思というよりも、周りの評価を気にしながら責任感により行動するようになってしまったと感じ、活動から離脱することにした。当時は落ち込んだが、こどもからかけられた言葉によって、こどもはずっと見守ってくれていたのだと感じた（移行段階）。こどもを笑顔にするためにママの笑顔が必要なので、他のママを笑顔にするために、自分も前向きに取り組んでいきたいと考えている（第三段階）。

次に、s-2 型について記述する。

Qさんの場合、母としてこどもの成長を近くで見守りたいと思い、前職を辞めて起業した。子育ての難しさを母として経験し、自分自身が求めていたように、気軽にママたちが参加できる場をつくりたいと、ベビーマッサージの資格をとっての起業だった。参加者が入れ替わっていくことでいろいろな人に会えることに、起業家としてやりがいを感じている（第二段階）。自分自身が参加者のママたちとは同世代でなくなり、参加者と起業家としての自分の間に心理的な距離が生まれてきた。母としてこどもにアロマオイルを使う中で、その良さに気づき、ほかのママたちにも取り入れてほしいと自分が思うようになり（移行段階）、マッサージと組み合わせた方法を開発して起業家として広めていこうとしている。どものためを考えて行動することで、事業につながるような発見があったり、こどもを通じて知り合いが増えたりし、それらはこどものおかげだと感じている（第三段階）。

4.1.4 will 駆動タイプの成熟プロセス

w-1 型について成熟プロセスの解釈を記述する。

Rさんの場合、会社勤めにやりがいを感じていたが、帰宅が毎日少しずつ遅くなり、こどもに負担がかかっているのを感じ母として「モヤモヤ」が蓄積してきて、退職した（第二段階）。こどもの近くでやりたいことを仕事にして働けば、自分も笑顔になり、こどもにとってもその方がうれしいだろうと考えるようになった（移行段階）。資格を取得して自宅で起業した。自分の経験から、歳にふさわしい服装やメイクについて困っている人に対して、専門家として力になりたいと考えている。自分が前向きに働いていることは、家族に対してもいい影響を与えることができ、好循環が生まれると考えており、これからもバランスは調整しながら働き続けていききたいと思っている（第三段階）。

Sさんの場合、いつか自分でも経営がしたい、夢を叶えたいと思い描きながら、家業の手伝いと子育てという娘と母の役割を果たす毎日だった。ある日自分が癒されたと感じたことをきっかけに、資格を取って起業した。店の運営が安定するまでは起業家の役割を優先する必要がある、母としてこどもの面倒を見るという役割が十分果たせていないと感じ続けていた（第二段階）。あとになってこどもとコミュニケーションをとる中で、「尊敬しているから後悔しないで」と伝えられ、母の役割は十分では

なかったかもしれないが、夢を叶える姿を見せるという自分の想いは実現できていたのだと感じ、事業には負担がつきもので葛藤が生じるものなのだと理解し、心残りのような気持が解消された（移行段階）。心理学の手法と出会い、起業家として、また自分自身として、ママたちのために広めていきたいと考えるようになった。母と起業家の役割の間に葛藤が生じるかもしれないが、一生懸命に生きるということを自分自身の姿勢でもってこどもに示すつもりで、チャレンジし続けていきたいと考えている（第三段階）。

次に、w-2 型について記述する。

T さんの場合、義理の両親と同居しながら子育てをしていた。「母親以外の何かをしたい」と思い、ベビーマッサーを学んでほかのママたちが集まれるサークルを開いたり、自由にできるお金を手に入れるために在宅ワークのアルバイトを経験した。母・妻として「最初に削るのはいつも自分のこと」で苦しくなった（第二段階）。その状況を変えるために物販のスキルを身に付けて起業した結果、経済的に自立を果たすことができ、同居を解消して義理の両親と程よい距離を保つことができるようになった。その頃から、ママ友たちから起業について相談を受けるようになり、アドバイスが求められているというニーズを感じたが、本格的に事業として取り組んでいくには自信がなかった。でも、他者の役に立ちたいという想いから、アドバイザーとして新たに起業することを決意した（移行段階）。周りは言いたいことを言うのが気にしなくていいんだと思うようになり、自分を好きでい続けられるかどうかということ判断基準にしながら、社会のために役に立っていきたくて考えている（第三段階）。

4.2 考察

4.2.1 役割間の葛藤や相互の影響に関する考察

産後、母として子育てに取り組む中で、家族以外とのつながりが途絶え、こどもが小さいうちは外部との接点も多くはない。特に起業前に働いていて出産を機に勤めを辞めたような場合は社会と断絶しているように感じ、「子育てオンリー」(I さん)で「引きこもりみたい」(H さん)になってしまっていると感じている。子育てや家事など母親の役割とされていることは「やって当たり前のこと」(J さん)とみなされていると感じ、「母じゃない、妻でもない、一人の女性として輝きたい」(E さん)と願う。同居していれば、暮らし方も働き方も「嫁だから」という理由で自分の行動が制限され、自分たち夫婦とこども以外の視線に常にさらされ生活することになる。「女性は草鞋をたくさん履いていて、育児、家事、介護などいろいろあって、結局最初に削るのは自分のやりたいこと、そうでなければ『いい母親じゃない』と言われる」(T さん)ような状況下で、自分の意思の優先度合は低く、自分のやりたいことを優先すれば自己中心的と言われ、「いい母親」でいようとすれば時に自分の意思を曲げることになるという構造が存在している。

以上は、慣習的な自己犠牲と他律的な態度が見られることから、第二段階であると考えられる。

そのような状況のもと、子育てに関連づけてやってみようという気持ちから、あるいは家計を支える必要性から、家庭の中だけでなく社会の中で役に立ちたいという想いからなどきっかけは様々であるが、起業に取り組み始める。

子育てとの時間のやり繰りが難しくなり、葛藤が生じる。例えばこどもの宿題を見てやることができず『こどもがかわいそう』と思うことも」(S さん) がある。注文が増えすぎて忙しくなり「こどもにかまえない」時期が続いていったん休業することもある (O さん)。事業を中断して子育てに専念 (L さん、I さん) したり、事業を絞り込んでこどもの成長とともに増やす (C さんなど) 人もいるが、起業の責任より子育ての責任を優先するという自らの意思で決定する場合と、支援してくれる人がいないためやむなくそうする場合がある。また、実質的に子育てや家事に割り当てる時間は減少するので、夫が求める水準と食い違い、摩擦が生じる場合もある。

自らの子育ての経験から、「他のママたちのためにできることがあるのではないかな」(C さん) と他者の子育ての苦勞に共感し、思いやりの気持ちから事業を展開する。

手作り品の販売では、イベントへの出店時に商品を見る客の反応を確認し、「ママがニヤ〜と笑顔になるのが嬉しい」(N さん)、「私の商品を求め、喜んでくれる人」(I さん) がいる。自分の商品を求めてくれる人がいると確信し、そういう人のために丁寧に作って届けようという意識が生まれる。対人サービスでは、サービスを提供する時のやりとりで、相手に感謝されることが嬉しく、「目の前の人に喜んでもらいたい」(J さん) という気持ちが生まれる。

起業を通じて自分が生み出すものを求めてくれる他者と出会い接することは、鷲田が言う「だれかある特定の他者にとって意味のある他者にじぶんがなりえているかどうか、わたしたちが自己というものを感じられるかどうかを決める」というまさにその意味において、自己を感じる機会となっている (鷲田, 2011, pp.139-140)。

自分の気持ちを明るく保つことはこどもや家族との接し方にいい影響を及ぼすということに意識的になり、そしてそれは母としての責任をより善く果たすことでもあると思うようになる。「ママが笑顔になれば、家族も幸せになれる」(E さん) のであり、「こどもを笑顔にするためには、ママの自分が笑顔になる必要がある」(P さん) のである。そして、だからこそ「母親は自分がやりたいことにしっかり取り組むべきである」(A さん) と、自分の気持ちの重要性を認識する。「基本は自分が楽しいと思えることを手掛けていきたい」(O さん)。こどものことを大切にするためには、それ以前に、自分の気持ちを尊重することが必要であることに気づくのである。

自分の意思に気づいており、移行段階である。

起業とは他者のために時間を使うことであり、起業に力を入れることは一時的には子育てをする時間が減るか

もしれないが、同時に起業家として他者と接し自分が喜びを得ることは、家庭内で笑顔で過ごすことにつながり子育てにも良い影響を与える可能性もある、というように、母の役割と起業家の役割は、一方を立てれば他方が立たないという関係ではなく、ある面では正の影響があり他の面では負の影響もあるというような、複雑な構造となる。

子育ての中で使えるようなスキルを事業の中で身に着けたり（Cさん、Qさん）、自分のこどもの将来に役立てるために経営基盤を確立しようとしたりというような、事業そのものが子育てに対して直接的ないい影響をもたらす場合もある。また、こどもが小学生になる頃には「本気でチャレンジする姿をこどもに見せたい」（Lさん）、「自分の姿を見て、仕事は楽しいと知ってほしい」（Dさん）という、起業に主体的に取り組むこと自体が、間接的にこどもにいい影響を与えるという認識が生まれる。このような構造が成立している時は、起業家としての責任を果たしながら、母の責任を同時に果たすことができ、役割の両立が可能となりやすい。

各役割を通じた他者との関係という複雑な構造の中で、周りへの影響を考慮しながら、自分が納得できる選択を模索し、葛藤を抱えながらも、「自分を好きでいられるように」（Tさん）自分の意思を尊重して決断できるようになる。起業に取り組むことは家族に正負両面の影響があることを認めた上で、ある程度の負の影響は「仕方ない」（Sさん）と受け入れながら前に進んでいけるようになる。そして「ママじゃない、妻でもない、一人の女性として輝きたかったけど。いまは、全部ひっくりめて自分だと思えるようになった。子育ては切り離したかったけど、いろんな経験をするから深みが増す。切り離さなくていいんだ、と。年齢を重ねるごとに、素敵になっていきたい」（Eさん）というように、自分の意思が尊重できた時に、自然に各役割を受け入れることができるようになっていく。こうして、母としての自己と、起業家である自己が自分と統合されていくと考えられる。

自律的に考える態度を身に着けるといふ、後慣習的な第三段階へと移行していると考えられた。

山岸（2010）は、ギリガンが道徳性の発達について示した2つの異なる思考形態および他者との関係性について、対人関係の中の「対称的関係」と「非対称的関係」と関連づけて整理しており、政治・経済等の公的領域は相手がだれかを問わず抽象的な人間を対象とする対称的関係が中心の領域であるのに対し、私的領域としての家庭は家族という取り替え不能の他者との非対称的関係が中心の領域であると指摘している。また、それぞれの領域において支配的な志向性について、それぞれ公正志向（justice orientation）と思いやり志向（care orientation）として紹介している。

子育て期の母親による起業は、「疲れたママたちを癒したい」（Eさん）、「私が作るものを大切に想ってくれる人とのつながりこそが重要」（Iさん）、「すぐに手を差し伸べられるような人になりたい」（Jさん）というように、

他者と向き合いながら、相手の要請に応えるという思いやりを持って取り組まれる。「お客さんがお客さんを連れてきてくれる」（Dさん）というように、口コミや紹介で顧客が増え活動の場が広がっていくのは、事業を通して誰かにとっての特別な存在になれているということの意味していると考えられる。そして、相手の喜ぶ表情を確かめ、感謝の言葉を受け取ることで、自分が生み出す物やサービスが相手から求められ、相手の役に立っていると実感し、やりがいを感じる。起業を通して他者と取り結ぶ関係は、このように非対称的である。他者との非対称な関係の中でその人のために役に立っているという実感を持つことで、ほかならぬ「自分」を見出ししていくことにつながっている。

子育て期の母親による起業について調査したところ、他者と非対称的関係を形成しながらケアの要請に応えるように取り組まれていることを確認した。山岸（2010）によれば、家庭という私的領域では非対称的関係が中心であり思いやり志向が支配的であるが、それに対し起業活動は公的領域であるとされ対称的関係が中心であり公正志向が支配的であるとされる。本来対称的関係が中心であるはずの起業活動において、他者と非対称的関係を形成しながら取り組まれる起業活動は、これまでの一般的な起業活動とは異なり思いやり志向が見て取れる。このような起業を、「思いやり志向の起業」と呼ぶことにする。また精神分析理論では、家庭内で父親はこどもに対して特別扱いをするわけではなく公平な対応をするが、母親はこどもに対して養護しケアすることが明らかにされており、父親とこどもの関係は対称的関係になる傾向にあるのに対し、母親は非対称的関係になる傾向にあるとされる（山岸，2010，p.453）。このことから、母親による起業では非対称的な関係が構築されやすいと考えられる。

なお、公正志向の起業の特徴を持つパターンも、少数ではあるが確認でき、起業のきっかけが公正志向のもの（Sさん、Tさん）、拡大傾向の内容が公正志向のもの（Lさん、Mさん、Qさん）がみられた。ただし、きっかけが公正志向でもその後の起業活動の中で思いやり志向の共感にもとづく事業展開をしていること、事業展開が公正志向でもその前後は思いやり志向が見られることなどにより、一貫して公正志向であるプロセスはなかった。

起業の役割と母の役割の間には、相互に影響し合う関係にある。事業に取り組みやりがいを感じることは、自分が笑顔になり家族にも明るい気持ちで接することができることにつながり、自分の気持ちを尊重することの重要性を認識するきっかけになっている。起業家の役割から母の役割への影響であると言える。

また、こどもが成長していくという時間軸に沿った変化が存在し、それに伴って母の役割も変化していく。こどもが小さい時ほど子育ての手も時間もかかるものであり、その負担はこどもの成長とともに軽減されていき事業に安定的に取り組めるようになる。またこどもが小学生になる頃から、母としての生き方からこどもに何を伝

えるかという視点が生まれ、主体的に起業に取り組もうとする姿勢につながっていく。母の役割から起業家の役割への影響であると言える。

同じく時間軸に沿った変化として、事業の内容がこどものためにもなっていたようなもの、例えばこどもを撮影した写真を使ったクラフトや、こどもへのマッサージなどは、自分のこどもが成長して家族の状況に適合しなくなったりこどもに適用できなくなったりすると、起業に対するモチベーションの低下につながる場合がある。またこどもが小学校に入学すると周囲のママ友が働きだすことにより、事業の顧客が減るという事業環境の変化につながることもある。このとき、ケアしたい他者を「見失う」と、取り組み方を変える必要が生じた際にうまく対応できず、Gさんのように自分のアイデンティティまで揺らぐという事態につながる場合もある。どのような他者に対してどのように役に立ちたいかを具体的に想定することで、QさんやMさん、Lさんのようにスムーズに対応していけると考えられる。

C. ギリガンのケアの倫理では、他者への献身による自己犠牲状態の限界を思い知り、他者とともに自己をも尊重するという態度を身に着けるというプロセスが描かれている。これに対し、本章では複数の役割を通した多元的な非対称的関係を維持・形成することにより、自己を尊重できるようになるというプロセスが得られた。すなわち、起業家の役割を通して他者と非対称な関係性を形成する中で自己を見出し、自分の気持ちを尊重することが母の役割を通して家族にもいい影響を与えることに気づき、役割間で生まれる葛藤と、それぞれが及ぼす複雑な影響の構造の中で、自分の意思を尊重できるようになるというプロセスを描き出した。

母親による思いやり志向の起業では、特にこどもが小さいころは急な体調の悪化が頻発するため、こどもへのケアを他に担う人がいなければ母親が看病をする事になり、事業は中止せざるを得ない場合も起こり得る。これに対して、公正志向から見ればビジネスにおいて「無責任な」人物であるという評価になり得る。しかし、例えば熱を出したこどもよりも事業を優先すれば、いい母親ではないという評価を自分に下すことになり、道徳的に問題が発生する。起業家の役割とともに母の役割も重視しながら取り組むことで成熟プロセスが進行していくものでもあり、こどもを犠牲にして起業に取り組むことは、成熟プロセスに支障が生じかねない。「起業家でもあり母でもある」状態で取り組みやすいように、思いやり志向のビジネス特有の対策が取り得るだろう。例えば、ママ起業家が参画するイベントや事業、会議などでは、急な欠席が生じるリスクをあらかじめ考慮に入れ、人員を多めに確保しておくことや、自宅にいながらも参画できるようなテレビ会議のような連絡手段をも想定しておくことなどの対策が考えられる。

4.2.2 駆動タイプによる成熟プロセスに関する考察

駆動タイプごとに成熟プロセスの傾向や特徴を考察す

る。なお、should 駆動タイプおよび will 駆動タイプは該当する成熟プロセスの数が少ないので、can 駆動タイプと単純に比較することはできないことに注意する必要がある。

can 駆動タイプについては、起業の手段 (can) として、特技・経験や趣味・好きなことを活かそうとする傾向にある。起業の背景は多様であるが、大きく分けて、出産を機に退職したものの子育てによるストレスなどをきっかけに子育てしながらでも可能なやり方で働くこと、趣味や特技の延長でこどものために手作りをしていたのが発展して周囲に提供できるようになること、などがある。

c-1 型は、顧客の要望に応える (should) という形や、自分のこどもにとっていいことで他の母親のため (should) にもなるような形で、事業を拡大している。また、夫との関係性から事業の取り組み方を変えている。

c-2 型および c-3 型の縮小経験について見てみると、最も多いのは事業活動と子育ての両立における困難がもとで can 要素が一時的に縮小するものである。それ以外に、周りの起業仲間の活動状況が気になるがゆえに自分の事業に集中しにくい (I さん、J さん)、好きなことを仕事にするため起業したが事業規模の限界を感じてモチベーション (will) が低下 (L さん)、こどもに関連する事業を始めたがこどもが成長した結果モチベーション (will) が低下し、同時に顧客であるママ友たちの行動も変化しサービスを求める人 (should) も減少している (G さん)、意義のある事業を考え付いたもののスキル (can) に自信が持てず安定的に取り組めない (H さん)、などである。

can 駆動タイプの特徴として挙げられるのは、まずは周りの起業仲間の活動状況が気になる点である。このタイプが特技や趣味を活かして楽しく事業に取り組もうとするため、楽しそうに取り組んでいるかどうかを重視する傾向にあり、そのため周囲の人と自分の状況を比較して確認しようとするのではない。ただ、他の起業家が発信する情報に惑わされてやりがいや低減しているような状況でも、自分が提供するものやことを求めてくれる他者の存在 (should) を励みに、やりがいや自信を回復している。また L さんと G さんの経験から、こどもの成長等と関連して事業へのモチベーションが低下する場合があるが、その時にスムーズに事業の対象や内容を変更し状況に適応するためには、自分が役に立ちたい他者 (should) を思い描けるかどうか重要となると考えられる。他のタイプと異なり can 駆動タイプでは、ある程度人気があれば should がしっかりと確立していなくとも事業に取り組んでいける場合があるので、かえって should を強く意識しておく必要がある。

c-3 型について見てみると、求められていることに応えたい (should) という気持ちに共感して仲間が増えたり資源が得られたりする (K さん)、事業自体に見通しが持てなくなってもほかに求められている (should) と感じることもあり展開していける (L さん)、身近なママ友など

のニーズ (should) を聞き取って商品に生かす (N さん)、事業が大きくなりすぎたときに本当に自分を役立てたいこと (should) を軸に事業の中で優先順位を検討する (O さん) など、苦境でも should をアンカーとして乗り越えていることが伺える。

should 駆動タイプは、「誰かのために、他者のために」必要な取組みがあると感じた経験をもとに起業しており、子育てや前職での経験からその必要性を見出している。

s-1 型 (P さん) は、自分を役立てたいと思うことに対して取り組むうちに思い描いていたような貢献ができていないと感じ、いったん取組みから離れているものの、起業活動の意義を別の should に見出して現在も起業活動に取り組んでいる。s-2 型 (Q さん) は自分のこどもが成長した結果事業への関心が薄れてしまったので、should への対応を担う人を育成し増やすという戦略に切り替えている。

will 駆動タイプは、自らが経営することへのあこがれや、こどもの近くで取り組める育児への負担が少ない働き方、経済的に自立するための手段など、働き方の面から起業が選ばれている。これらがきっかけになっているものの、新しく出会った有用なスキル・技術や自らの事業経験などの資源 (can) について、それを必要としている人 (should) のために役立てようと新事業に着手している (w-1 の S さん、w-2 の T さん)。働き方に着目して起業を選んだものの、取り組む中で周りの身近な人の声や自分の子育て経験から should を見出し、意識するようになっていっていると考えられた。

駆動タイプごとの成熟プロセスを見てきた。can 駆動タイプと should 駆動タイプの一部、will 駆動タイプの一部で見られた要素が縮小する変化としては、事業に取り組みたいが自信が十分持てない場合や、自身の起業への姿勢・モチベーションが低下した場合、事業環境が変化したため取り組み方を変える必要がある場合などであった。これらに対処するには、自分は誰のために役に立ちたいのかという should を明確にしておく必要がある。特技や趣味をきっかけとして起業する can 駆動タイプにおいては、自分が楽しく取り組んでいるかどうかに注意を払う態度が見受けられた。事業を通して向き合う相手としての他者をより意識し、相手から求められる should を確認することがより重要であると考えられた。思いやり志向の起業では、他者と非対称な関係性を形成する中で自分が相手の役に立っていると実感されることから、should を明確にするためには、他者と触れ合いやりとりできるような小さな実践を早い段階から行うことが重要になると考えられる。

5. 結論

子育て期の母親である起業家 20 人へインタビューを行い、母の役割、起業家の役割、自分の区別に着目し、それぞれにおいて他者との関係を維持・形成しながら成熟していくプロセスを C. ギリガンによるケアの倫理に基づいて検証した。

子育て期の母親による起業は他者と向き合いながら、相手の要請に応えるという姿勢、すなわち思いやりを持って取り組まれ、相手の喜ぶ表情を確かめ感謝の言葉を受け取りながら、自分が提供するものが相手から求められ役に立っていると実感しやりがいを感じるような、非対称的な関係を形成しながら取り組まれる傾向にある。起業活動は本来公的領域であるとされ、対称的な関係が中心で公正志向が支配的であるとされるにもかかわらず、今回の検討からは非対称的な関係を形成しながら取り組まれることが明らかになった。このような起業は公正志向に対しての「思いやり志向の起業」と呼ぶことができる。

起業すると、起業家の役割を通して他者と非対称な関係性を形成する中で「他者の他者としての自分」を見出す。そして、自分の気持ちを尊重することが母の役割を通して家族にもいい影響を与えることに気づく。各役割への時間の配分において葛藤が生じるが、起業に取り組むことは子育てに正負両面の影響を与えるという複雑な影響の構造の中で、それぞれに与える影響の大きさを考慮しながら自分が納得できる選択を模索し決断できるようになっていると考えられた。こどもの成長という時間軸が存在し、こどもが成長すると、母としての生き方からこどもに何を伝えるかという視点が生まれ、主体的に起業に取り組もうとする姿勢につながり、子育てと起業の両立が果たされやすくなると考えられる。ママ起業家が参画する事業などでは子どもの急なケアの必要性を理由として欠員が生じるリスクをあらかじめ考慮し事業を組み立てておくなど、母親の役割を犠牲にしないような配慮が重要である。そのような配慮を本人たちも周りも意識することで、ママ起業家たちはよりスムーズに成熟プロセスを進めていけると考えられた。

成熟プロセスについて、できること (can)、求められていること (should)、やりたいこと (will) という要素を当てはめ、最初のきっかけとなった要素から「can 駆動タイプ」「should 駆動タイプ」「will 駆動タイプ」に分類し、その後の要素の変化に着目してさらに細かく全 7 つの類型に整理した上で、それぞれの傾向を考察した。特技や趣味をきっかけとして起業する can 駆動タイプにおいては、楽しく取り組んでいることを重視する傾向が見受けられた。事業に取り組む中で発生する環境の変化やモチベーションの低下などの変化に対してスムーズに対処するためには、自分は誰のために役に立ちたいのかという should を明確にしておくことが重要であるため、特に can 駆動タイプは実際にサービス等を提供し非対称的な関係をつくりながら感触を確かめるという小さな実践の機会を早い段階から設けることが必要になると考えられた。

思いやり志向の起業は、孤立して子育てをしている母親のような、ケアを必要とする傷つきやすい存在であるのに社会の中で支援が行き届いてこなかった他者に対し、アプローチしていくケアの実践であると言える。社会的な包摂を検討するシティズンシップに関する分野では、岡野により、ケアが必要な者が放置されない「他者に

答しあう」新しいシティズンシップ論の可能性が検討されている(岡野, 2009, pp.269-273)。その中で、グディンによる「Vulnerability Model」によると、社会の中で誰がケアを必要としていて誰が最も効果的にケアできるかが重要であるとされる。思いやり志向の起業を通して他者へのケアを実践していくことにより、グディンのいうところの新しいシティズンシップによってたつ市民につながっていくと考えられる。

今後の課題としては、思いやり志向にもとづく他者との対話による支援がより重要になっていくと考えられるため、母親だけでなく周辺の支援者も含めたヒアリング調査により対話の重要性を明らかにする必要がある。また、今後ママ起業家に有効な支援策を明らかにするためには、いわゆる成功を収めている起業家のみならず、起業を通じて人格的な成熟に至っていないママ起業家に対する調査を併せて実施する必要があると考えられる。

謝辞

ヒアリング調査にご協力いただいた皆様と、調査のコーディネート等の面で協力いただいたコワーキング「aeru」の芦澤様に、心より御礼申し上げます。

引用文献

- 今井朗子・座光寺良子・宮坂安壽恵 (2006). 女性起業家に学ぶ—自己表現と自分起こし—. 地域総合研究, No. 6, 329-351.
- エドガー・H・シャイン (2003). キャリア・アンカー—自分のほんとうの価値を発見しよう—. 白桃書房.
- 内閣府男女共同参画局 (2018). <http://www.gender.go.jp/policy/sokushin/ouen/area/businessplan/>
- 大野雄太・土田志郎 (2015). 農村女性起業経営者の経営者特性の評価—農村女性起業個人経営体を対象として—. 食農と環境, No. 16, 134-141.
- 岡野八代 (2009). シティズンシップの政治学—国民・国家主義批判—. 白澤社.
- 柏木恵子 (2003). 家族心理学—社会変動・発達・ジェンダーの視点—. 東京大学出版会.
- 鹿住倫世 (2017). 女性の起業と求められる支援策—「ママ起業」に着目して—. 商工金融, Vol. 67, No. 4, 5-26.
- 加藤久和・財務省財務総合政策研究所 (2016). 女性が活躍する社会の実現. 中央経済社.
- キャロル・ギリガン著・岩男寿美子監訳ほか (1986). もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティー—. 川島書店.
- 経済産業省 (2011). 女性起業家に関するアンケート調査.
- 経済産業省 (2016). 平成27年度女性起業家等実態調査.
- 公益財団法人埼玉県産業振興公社 (2018). <http://www.saitama-j.or.jp/sogyo/woman/puti.html>.
- 古賀慎二 (2011). 東京都区部における女性起業家の就業行動と意識の特徴—男性起業家との比較を中心に—. 立命館地理学, No. 23, 67-80.
- 小坂千秋・柏木恵子 (2005). 育児期フルタイム就労女性の育児への態度・感情. 発達研究, Vol. 19, 81-96.
- 西山未真 (2012). 地域再生のための農村女性起業の役割と課題—海の恵みを生かして私たちの経営改善—高知県四万十町旧十和村「おかみさん市」を事例として—. 村落社会研究, No. 48, 145-180.
- 東山弘子 (2006). 母性の喪失と再生—事例にみる「母」としての愛と葛藤—. 創元社.
- 藤田昌子 (2015). 漁村における女性起業活動の課題と支援策—「海の恵みを生かして私たちの経営改善: 漁村女性による経済活動の取組事例」をもとにして—. 愛媛大学教育学部紀要, No. 62, 213-219.
- 矢澤澄子・岡村清子・東京女子大学女性学研究所 (2009). 女性とライフキャリア. 勁草書房.
- 矢澤澄子・国広陽子・天童睦子 (2003). 都市環境と子育て—少子化・ジェンダー・シティズンシップ—. 勁草書房.
- 安河内恵子 (2008). 既婚女性の就業とネットワーク. ミネルヴァ書房.
- 山岸明子 (2010). 道徳性発達とジェンダーの問題—Kohlberg & Gilligan 理論再考—. 順天堂スポーツ健康科学研究, Vol. 1, No. 4, 449-456.
- 驚田清一 (2011). だれのための仕事—労働 vs 余暇を超えて—. 講談社学術文庫.
- 渡辺啓巳・遠藤和子 (2007). 農村女性による起業活動の零細性に関する考察—「平成16年度農村女性による起業活動実態調査」に対する補充調査結果から—. 農村生活研究, No. 51, 12-19.

Abstract

This paper aims to figure out the process of mature while maintaining and forming relationships with others based on Gilligan's care ethics, focusing on the role of mothers, the role of entrepreneurs, their own distinctions, by interviewing 20 entrepreneurs who are parenting mothers. In addition, the elements of 'can', 'should' and 'will' were applied to the maturation process to classify, and the each tendency was examined. In the formation of an asymmetric relationship with others through the role of entrepreneurs, they can find themselves as others of others. And they realize that respecting their feelings will have a positive impact on their family through their mother's role. Conflicts arise in the allocation of time to each role, but it seems that it is possible to seek out which choices can be satisfied and decide, while considering the magnitude of the influence on each, within the structure of complex influences. It can be called a 'care-oriented entrepreneur' who work on emphasizing asymmetric relationships with others, in a public domain. It is important to take care not to sacrifice the role of mothers, even while working on business as an entrepreneur. To that end, it is important to disseminate an understanding of the surrounding care-oriented entrepreneurship. In order to deal smoothly with changes such as changes in the environment and lowering motivation that occur while working on the

project, the element of 'should' becomes important. Especially in the type that was started as a trigger by 'can', it is necessary to provide opportunities for small practice from the early stage of actually providing services to establish asymmetric relationship.

(受稿：2018 年 4 月 10 日 受理：2018 年 6 月 14 日)